
笑いの神様のいたずら

誠次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑いの神様のいたずら

【Zコード】

Z4815F

【作者名】

誠次郎

【あらすじ】

漫才グランプリで優勝した吉田と小杉だが、思ったように東京では仕事が取れなかつた。そこで思いついたのがライバルの藤元＆原西コンビを抹殺することだった。抹殺しようとして、うまくいったのか！？

(一四三)

吉田と小杉は有名な漫才グランプリに優勝した。

優勝した勢いで東京進出を図つたが思つように仕事が取れなかつた。

最近では、吉田&小杉のコンビよりも、若手で勢いのある漫才コンビが

東京での特番にひっぱりだいで、大阪から出てきたとき想像していつたのと

様子が違つていた。

その中でも、若手の藤元と原西のコンビは鋭いキレのあるギャグで、吉田&小杉をけ落として、番組出場枠を手中に收めていった。

「吉田、お前らは、グランプリ優勝がピークやつたなあ」と先輩芸人からは言われる始末だつた。

特に、藤元&原西コンビには「」とく番組枠を争つて、負けいだ。

このままだと東京での仕事もなく都落ちといつ事態が後ろから迫つてきていた。

「今度は負けられへんぞ。次こそは俺たちがレギュラーの座を勝ち取るんや」

小杉が気合いを込めていった。

「どうした、吉田、暗い顔して。疲れてるのか?」

「いや、なんでもない。それより、藤元と原西のどちらかが今いなくなつたら

今度の番組のレギュラーは俺たちのものになると思わないか

吉田が、暗い目で、小杉に提案した。

「それはそうだけど、いなくなつてもいい。どうするんだよ」

「・・・・・・」

小杉がはつと気がついた。

「お前まさか、藤元さんが原西さんに危害を加えるとかするんじゃないだろ？」

立ち上がり、小杉は吉田の肩をぐつと押されて、真っ直ぐに吉田の顔を見た。

「まあ、まかせとけや。俺にええ考えがあるんや」

吉田はそういうと、小杉の手を振り払つて立ち上がった。

その日の午後、藤元と原西が漫才を終えて、舞台からおりてきた。舞台の裾からみてた吉田は、端の方の暗いところで、偶然手に入れた反魂の書を読み上げながら、片手に持つた棒きれを藤元と原西の頭上からえいやで振り下ろした。

二人は頭と口から血を流して倒れた。

一瞬の出来心とはいえ、目の前の惨状に吉田は動転してしまった。あわてて、傷の浅い藤元の腰を抱きかかえ、

「大丈夫ですか？」
と何度も体を震わせながら、声をかけた。

「大丈夫ですか？」

しばらくして藤元は、吉田の声で意識が戻った。

気がついた藤元は、目の前で血を流している原西を発見する。

「は、わ、原西、おい大丈夫か？」

藤元は目の前で血だらけになつて倒れている原西を見て仰天した。藤元は、原西の体をゆすつてみたが、反応はなかつた。

「し、死んでるー！」

と藤元は叫び声をあげた。

そのとき、どこか遠くから藤元の頭の中へ、原西の声が聞こえてきた。

「やべえよ、おい。俺殺されちゃつてるよ」

「ちょ、ヤバイよ。で、原西、お前は今どこにいるだ？」

「俺は、藤元、お前の中にはいる」

「じゃあ俺たち合体しちゃったのか。って、これじゃ明日から漫才できねえじゃねえか」

と、そのとき、血を流している原西の体がむっくつと立り上がった。それを見て藤元は腰を抜かした。

「・・・あ、あしたも、、い、い、で、ネタ合わせ、、しよう。じや、また、あしたな」

原西の体はそういって楽屋から出て行った。

「お、おいどうなってんだよ、これ」

藤元は上ずつた声で叫んだ。

「俺にもわからん。今出て行つた奴は誰なんだ一体ー?」

藤元の頭の中で原西もうなり声をあげた

吉田が、心配そうに見ながら、藤元の肩を抱え上げた。

(一四四)

翌日、藤元が起きた時、原西が頭の中から声をかけてきた。

「おーー、俺はこれから二日のうちに元の体に戻らなことあの世へきだつてさ」

「あ、そう。それより、今日の漫才どうするんだよ」

「おー、『あ、そう』で流すなよ。相方が死ぬかどうかの瀬戸際なんだぞ」

「ごめんごめん。それより今日の舞台どうするんだよ。俺一人じゃ漫才できないぞ」

原西とあれやこれや言いながらも、藤元が衣装に着替える。がらつとふすまが開いて、藤元の母が入ってきた。

「あんた、朝から何ぶつぶつ独り言言つてるんだよ」

「朝からうるせえなあ、かあちゃん」

「それより、朝飯出来たから早く食べ」降りていりつしゃい

「わかったよ。今行くよ」

「今くるよ。どえす

「朝からくだらないダジャレとばしてんじゃねえよ」

藤元はため息をついて、母の背中を押して、階下の食堂へおりていった。

「おかわり」

「あんた今朝は良く食うね。どうしたんだい」

「え、そうかな。今、絶好調なんだよね」

「あらそう。良かつたわねえ」

藤元の母は感心したようにうなずいた。

「親子そろって感心してる場合じゃないだろ」

原西が藤元の頭の中から叫んだ。

そのとき、原西の母がやってきた。

「うちの息子の様子がおかしいのよ。顔色が悪くて、なんだか死人みたいで。

今朝も食事を取らなかつたし」

藤元は相方の母親同士の会話に割つて入つた。

そして、昨日の起きたこと、今原西の魂が藤元の中にいることを身振り手振りでしゃべつた。

最初は笑つて本気にしなかつた原西の母も、藤元の口から親子でしかわからない秘密がどんどん出てきて顔が青ざめてきた。

「じゃ、今家にいるあれは何？ 息子じゃないの」

「はい、息子さんはここにいます」

藤元はまじめな顔で自分の頭を指さした。

「どうすればいいのよ。三日たてばうちの息子は本当に死んじゃうのよ」

「靈媒師を呼びましょ。靈媒師に原西の今の体から変な靈を追い出していくことにいる原西の魂を元の体にもどしましょ」

早急に靈媒師を呼ぶことに決めた三人、いや原西の魂も入れて四人は、早速マネージャーに電話をかけた。

藤元は電話で昨日からの出来事を話した

「それで、原西君にはどう対応すればいいのかね」

マネージャーは困ったようなあきれたような調子で聞き返した。

「靈媒師を連れてきて欲しいんです。原西君の体に魂がちゃんと戻せるように」

「分かった。探しておきましょ。で、他に何があるかね」

「僕らを襲つた犯人を見つけ出して欲しいんです。こうなつたのも、昨日樂屋の裏で誰かに背後から殴られて、気がついたらこうなつてたんですよ」

「気がついたとき誰かいたのか」

「吉田がいました」

一呼吸置いて、藤元とマネージャーが声を揃えて

「あーっ！ まちがいない！ 犯人は吉田だ！！」

と電話口で叫んだ。

マネージャーは靈媒師の件を快く引き受け、今夜にでも有名な靈媒師を原西の家に連れていくと約束した。

そして、明日にでも吉田を連れていつて事情を聞こいつこいつになつた。

午後、藤元が樂屋に行くと既に原西が来ていた。

原西の魂は藤元の体の中にはつて、目の前で一緒にネタ合わせをするこの抜け殻は、一体何者なんだろうと思つた。

ネタそのものは藤元の頭の中の原西から教わつた。それを抜け殻ともいえる原西の体と

ネタあわせをして、リズムや間をとる練習をした。

その日の舞台は大受けだつた。

生氣のない原西の目に、一瞬観客は引いたが、いつも以上に切れのいいギャグを連発した

原西の抜け殻は、その死んだような目と切れのいいギャグの落差からいつになく大きな笑いをとつた。

漫才を終えて、舞台を降りた藤元は、舞台の袖から明石家に声をかけられた。

「おまえ、どうしたんや。芸風を変えたのか」

「ありがとうございます。おかげで今日はガツシンガツシン笑わせましたよ」

「そうやない。相方の原西が無口になつてシユールな芸風になるのはいいんやけど、そんのは、お前らすぐに飽きられるで」

藤元は明石家にいきなり核心を突かれ動搖した。

「そ、そうですか。アドバイスありがとうございます」

動搖を隠すように頭を下げ、足早に藤元は楽屋に戻つていった。

藤元は、誰かわからない原西の体を引つ張つて家に帰つた。

夜になつて、マネージャーが連れてきた女性靈媒師の鳥居がやつてきた。

鳥居による靈媒式が行われた。
しかし、鳥居はギャンギャン騒いで変な踊りを見せただけで、何の効果もなかつた。

「おいおい、これじゃダメだろ。俺はまだお前の中だぞ」

藤元の中から、原西が怒り半分あきらめ半分でこぼした。

(三日四)

藤元は無理矢理ついてきた原西の母と一緒に楽屋入りした。
このまま何もしないで今日が終わつたら原西は本当に死んでしまうのだ。

原西の母は家でじつとしていられず、抜け殻になつた息子を連れて藤元の家にいき、藤元にくつついたまま楽屋まで来てしまつた。

藤元が原西の母と話し込んでいる時、楽屋に、マネージャーが来た。
「今日の舞台が終わつたら、ブラックマヨネーズの吉田をここに連れてくるからね」

「わかりました。僕ら三人でここで待つてます」

藤元はマネージャーと入れ替わりで、原西の抜け殻を引っ張つて舞台に上がつていった。

「なんだ。見事に笑いを取つてゐるじゃないか。これなり」のままでいいかも」

と、原西の母の前で思わず口に出して言つてしまつた。

「じらつー何を言つとるんじやあんたはーうちの息子が死んでもええんか」

マネージャーは、原西の母から思いつきり首を締め上げられた。

「すみません、すみません」

マネージャーは何度も謝つて、ようやく羽交い締めを解いて、許してもらつた。

「すみません」

小声で、吉田が相方の小杉に伴わされて、楽屋にやつてきた。

「あ、吉田君。まあ、そこに座りなさい。小杉君もこつちの奥の席に座りなさい」

マネージャーに言われるまま、一人はイスに腰掛けた。

その吉田に原西の母がくつてかかるつとしたが、マネージャーが間に入つた。

漫才が終わり、藤元と原西の体は舞台から楽屋に戻つてきた。

吉田の姿を見つけると藤元が駆け寄つて、問い合わせた。

「なんでこんなことをした？ 何か恨みでもあるのか？」

つかみかからんばかりの勢いで藤元は吉田を締め上げた。マネージャーが藤元を吉田から引き離し、静かに言つた。

「君がやつたのかね」

「はい、そうです」

吉田は消え入りそうな声で答えた。

「なんでこんなことをしたのかね」

「え、それは、笑いの神様が俺の前に現れて」

「笑いの神様！？」

藤元が声をあげた。

「それで？」

マネージャーが吉田をうながした。

「笑いの神様が、フルテンションから『臨終』と言つてゐる時に、『ご臨終させればもう一度笑いの頂点に立てるぞ』といいまして。それで、舞台から降りてきた藤元さんと原西さんの一人を後ろから殴つて、笑いの神様からもらつた反魂の紙を読み上げたんです。そしたら、原西さんが本当に『臨終』になりかかつて。それで俺、驚いて、その場で立ちすくんでしまつて」

「で、何とか無事である藤元君を助け起こしたと」「はい、そうです」

吉田は、俯いたまま言つた。

「M・1のチャンピオンになつたからつて、今では仕事も減る一方です。もつと東京で仕事がしたいんです」

吉田は、涙を浮かべて声をあげた。

「あほか！お前らみたいなブツブツと禿が東京来て売れると思つてるのか」

藤元は、吉田のイスを思いつきり蹴り上げた。

「でも、俺ら一四〇〇組の漫才の頂点に立つた男ですよ」

きつとなつて吉田は藤元をにらみつけた。

「いつまで言うとんねん」

後ろから小杉が、吉田の頭をひっぱいた。

「それより、どうすれば息子が帰つてくるのでしょうか。今『元あるあの抜け殻をすぐに元に戻して欲しい』

原西の母が、原西の体、何も言わず座つたままの抜け殻を指をして、言つた。

「反魂の紙には戻し方が書いてないのか？逆のことをすればいいんじゃないのか」

マネージャーが言つた。

吉田はポケットをまさぐつて反魂の紙を取り出した。

「はい。あつ、書いてあります」

「おー、何て書いてあるんだ?どうすれば元に戻れるんだ?」

藤元の体を通じて原西が聞いた。

マネージャーや吉田、そして原西の母は一斉に藤元の方を振り返った。

「おお、原西君。声は出せるんだね」

「はい、原西です。今藤元の意識を乗っ取つて、声を出しています」

原西の母が藤元に抱きついて喜んだ。

「母ちゃん、まだ喜んでる場合じゃないよ。早くしないとこのまま天に召されてしまつんだよ」

「そ、そうだね。まだ喜ぶには早いわね。あんたの声を久しぶりに聞けてわたしは嬉しいよ」

「久しぶりつて、たつたの三日ぶりじゃないか」

原西はあきれた。

「で、どうすればいいのかね、吉田君」

「はい、まず俺が反魂を最後から読み上げます。そして、僕と原西さん、今は藤元さんの体ですが」

「原西さんと俺がじょんけん五回勝負をして原西さんが先に3勝し、その場でギャグをして笑いの神様を笑わせれば元の体に戻れます」

神妙な面持ちで吉田が言った。

一瞬微妙な空気が流れた。

マネージャーは原西の母の顔をみて、うなづいた。

「やりなさい」

と吉田に言い渡した。

吉田は、こくりとうなづいた。

吉田は、反魂を後ろから読み上げた。

そして、藤元の体を通して原西が、吉田に声をかけた。

「じゃんけんぽん!」

吉田がグー、原西がチョキだった。

「やつたあー」

吉田が両手を振り上げた。

「お前、なに喜んでんねん。お前が勝つたらあかんやん」
後ろに立っていた小杉が、吉田の頭をたたいた。

「いつたいなあ。俺はチャンピオンやぞ。運もいいや」
「そういう話やないやろ。原西さん殺すつもりか」

「あつ、やつやつたな。」「めん」

吉田は顔を搔いた。

「よーし、次いくぞ。じゃんけんぽん!」

吉田がパー、原西がグーだった。

「あかん。どうしても勝つてしまつ。M-1のチャンピオンは運も
強いやなあ」

と吉田は思わず口を滑らした。

マネージャーを始め楽屋にいた一同は真っ青な顔をしていた。

「もうあとがない。何とか負けられへんのか」

小杉が顔中から汗をふき出しながらいった。

原西の母が今にも泣きそうな顔をしていた。

「よーし、次の勝負だ!」

原西がめいっぱい力を込めて言つた。

「じゃんけんぽん!」

吉田がチョキ、原西がグーだった。

「よし、ここでギャグをかませ!」

普段は冷静なマネージャーが、興奮して声をはりあげた。

「自己紹介!」

原西は渾身のギャグを放つた。

どこからか、「オーケー」という声が聞こえた。

その声はどことなく明石家に似ていた。

「よし、一つ勝つた。次、勝負だ!」

マネージャーが気合いをこめて言つた。

「じゃんけんぽん!」

吉田がグー、原西がパーだった。

「必殺！デフレスパイラル！！」

原西は新ギヤグを披露した。

またも、「オーケー」という声が聞こえた。

その声はやはり、何となく明石家に似ていた。

「よし、次でいけますよ、がんばれ原西さん！」

小杉が後ろから大声をあげた。

「じゃんけんぽん！」

吉田がチョキ、原西がパーだった。

空気が凍り付いた。

一瞬、時が止まった。

何秒待つても神様からの声は、聞こえなかつた。

「もうダメか

マネージャーはうなり声をあげた。

原西の母が泣き崩れた。

そのとき、原西の抜け殻となつた体が立ち上がつた。そして

「フルテンションから『臨終』

とギヤグを放つた。

とつたに、原西の魂は、藤元の体を使って、ギヤグを返した。

「『臨終からフルテンション！』

「笑えないよ

とみんながそう思つた。

その時、またしてもどこからともなく

「ようやつた。戻つてええで」

と、これも思いつきり明石家に似た声が楽屋の中を響き渡つた。

一瞬の間。

藤元の耳から白い物体が飛び出した。

そして、あつという間に、元の体に入つていつた。

数秒が過ぎた。

突然、原西の体が動いた。

「あつ、痛い」

原西が頭をかかえてうめいた。

「やつた！ 戻つた」

マネージャーをはじめ全員が原西の元に駆け寄つた。

「大丈夫？ 本当に元に戻つたのね」

原西の母が、抱きかかえるようにして、原西を立たせた。

「え、う、うん。大丈夫だけど。それより誰か俺の頭を殴つたな」

そういうと原西は目の前にいた吉田に気づいた。

「あ、お前か、殴つたのは。もう、痛いじゃないか」

吉田は、直立不動に立ち上がり、何度も何度も深く頭を下げる謝つた。

（終わり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4815f/>

笑いの神様のいたずら

2010年12月24日02時27分発行